

## 私の恋愛論・教育論

塩野和夫

### はじめに

「私の恋愛論・教育論」を論説として『国際文化論集』に投稿するのは適切なかどうかをめぐって、いささかの躊躇があった。それにもかかわらず掲載へと決断した理由は何なのか。初めにそのいきさつについて述べておきたい。

そもそも本論は1998（平成10）年5月6日と7日に福岡女学院大学で行った2回の講演，すなわち「私の恋愛論」と「私の教育論」を1つにまとめたものである。女子学生が聴衆であったので，彼女たちが興味を持って耳を傾けてくれるように内容を整えた。そこで，いずれの講演においてもタイトルに「私の」という形容を付けた。女子学生に語りかけるため個人的な経験を織り交ぜたからである。しかし，まさにこの点で論説としての妥当性を考えさせられた。つまり，「私の」と形容のつく作品は論説に値するのか。個人的な経験を随所に入れた作品は遠慮すべきではないのか。他方，いずれの題目も「…論」と結ばれている。このことは「私の恋愛論」にしても「私の教育論」にしても，それらが単なる経験の叙述に終わらず論を立てている事実を語っている。この点に着目すると，「論があれば論説とする可能性は保たれている」と判断できる。

逡巡する中で『国際文化論集』へ論説としての投稿を決断させたのは，その内容である。自己の経験を交えながら論理を組んで語っている内容は，キリスト教教育の主要な課題である愛と教育についてである。これらは創立百周年を迎えようとする西南学院で，もう一度踏みとどまって熟考すべき事柄に違いない。そうだとすれば，キリスト教系大学の論集における「私の恋愛論・教育論」の発表にはいささかの意味があると考えられる。このような結論に至った

ので、論説としてまとめることにした。

ところで、講演会場の雰囲気伝えるために語り口調や講演における話題を残している。同じ意味合いで最後の祈祷もあえて記しておいた。

## 1 私の恋愛論

### 序 — 雅歌の題材

雅歌の題材は若い男女の恋愛です。雅歌では第2章8節から第3章4節までが「第2の歌」とされています。その中にある第2章10節～13節を一つの歌と見ることが出来ます<sup>1)</sup>。

- 10 恋しい人は言います。  
 「恋人よ、美しいひとよ  
 さあ、立って出ておいで。
- 11 ごらん、冬は去り、雨の季節は終わった。
- 12 花は地に咲きいで、小鳥の歌うときが来た。  
 この里にも山鳩の声が聞こえる
- 13 いちじくの実は熟し、ぶどうの花は香る。  
 恋人よ、美しいひとよ  
 さあ、立って出ておいで。  
 ……」

これは「おとめの歌」です。乙女が恋人を思い、いとしい恋人は彼女に歌いかけている。その恋人の歌に心を踊らせながら彼女は歌っています。10節「恋人よ、美しいひとよ。さあ、立って出ておいで」は、愛への呼びかけです。これを「a」とします。すると、11節「ごらん、冬は去り、雨の季節は終わった」は「b」で、愛の時節の到来を歌っています。12節「花は地に咲きいで、小鳥の歌うときが来た。この里にも山鳩の声が聞こえる」は「c」で、花が、小鳥が、山鳩が、愛の世界を生きっていると歌っています。つまり、10節から12節は「a・b・c」と続きます。それに対して、13節前半「いちじくの実は熟し、ぶ

---

1) この歌を、第2章10節～14節と解釈することもできる。ここでは第2章10節～13節という立場を採る。

どうの花は香る」は11節に対応する「b'」で、到来した愛の時節は熟していると歌います。13節後半「恋人よ、美しいひとよ。さあ、立って出ておいで」は10節と同じ言葉を使う「a'」で、恋人に愛への応答を呼びかけています。このように詩的な構造を整えて「おとめの歌」は恋する心を歌っています。

みなさんは心ときめかせ、このような歌を心に響かせたことがあるでしょうか。花や小鳥、山鳩にたとえて歌われている愛の世界を知っておられるでしょうか。

高校生の時に教会学校の先生からこのように言われました。

塩野はまだ恋愛を本気でしたことがないからいかん。自分を賭けてラブレターを書いたことがないから本当のことが分からない。ラブレターを書く真剣さ、あの真剣さを経験していないと人生も信仰も分かりようがない。

恋愛がすべてではありません。人生を教えてくれるものはいろいろあります。しかし、様々な経験を経て「恋愛は青年をふさわしく輝いて生きる青春へと招いてくれている」と考えています。そこで、「私の恋愛論」と題して恋愛について愛することについてしばらくご一緒に考えてみたいのです。

## (1) 初恋論

皆さんはそれぞれに大切な初恋の思い出を持っておられると思います。ところで、初恋とは何なのでしょう。

私の経験を紹介します。高校1年生の梅雨に入った頃でした。ふとした出会いからある少女と文通を始めていました。月に1回くらいのやり取りでしたが、だんだんと手紙がたまっていきます。宝物がたまっていきます。宝物を思うと、心と体の中に何かうごめいている。今まで知らなかったエネルギーが燃えている。ところが、このうごめいているものが何なのか。体の中のエネルギーが何なのか全く分からない。だから、12月も終わろうとするある夜に庭に出て、送られてきた大切な手紙の全てを焼いてしまったのです。焼くしか仕方がなかったのです。その時に書いた詩です。

寒い夜にそっとマッチをすった。  
燃えていく。君の手紙が燃えていく。  
ぼくの心が燃えている。

小さな経験を手がかりにして、初恋について3つのことを申し上げます。

第1に人は何時初恋をするかです。私の考えでは人は少年少女の日から青年期へと移って行く時に初恋をします。逆に言うと、初恋というのはその人が青春に入りつつあるしるしなのです。もちろん、もっと小さい時に誰かを好きになります。しかし、それを初恋とは私は考えません。青年へと移行する時に、人は心と体の深い所にうごめく何かに気づきます。それは自分を動かすほどのエネルギーなのですけれども、コントロールするのがとても難しい。このようなエネルギーに突き動かされながら、青年は異性をいとおしく思う。だから、初恋とは青年期の入口に入った人が経験する恋なのです。

第2に初恋は生まれて初めて経験する恋です。ですから、世界が輝いて見える喜びが一体何なのかが分からない。自分を突き動かすエネルギーを一体どうすればよいのかが全く分からない。だから、どうしようもないのです。その時に、私であれば文通を断って、手紙を焼くしかなかったのです。

そこで、第3にもう少し違った側面から初恋について考えます。愛とは相手との対話を通して育てられていくものです。豊かな対話によって相手を深く知り、お互いの喜びをさらに大きくしていきます。ところが、初恋において人は愛することに全く未熟です。燃えるような思いはあるけれども、それをどのようにして対話へと展開していくのかが分からない。だから、自分の中に相手のイメージだけを美しく育ててしまします。しかし、そのイメージは現実の相手とは全く違います。だから、初恋は破れるのです。

## (2) 愛を育てる

恋愛における重要な課題は愛を育てることです。どれほど人をいとおしく思っても、その思いだけでは愛は育ちません。それでは何によって愛を育てる

ことができるのでしょうか。そこで、E. フロムが『愛するということ』<sup>2)</sup>という著作の中で語っている愛の習熟から考えていきます。

フロムはまず「愛は技術であろうか、それとも快い感じにすぎないのか」と問います<sup>3)</sup>。皆さんは「愛は技術なのか、快い感じなのか」と聞かれたら、どのように答えられるのでしょうか。彼はもし「愛が技術」だとすると、「愛するためには、知識と努力とが必要となる」と言います。他方もし、「愛が快い感じ」だとしたら、「そこに落ち込む必要」があるので、人はいつまでもその幸運を待たなければならないのです。そのように仮定した上で、フロムは「愛は技術」という立場を採ります。この判断について、私自身は愛には「技術」という側面と「快い感じ」という側面の両方があると考えています。その上で、彼は愛の大切な一面を見事に捉えていると思われます。そこで、フロムの主張をさらに紹介します。

フロムは愛の技術を学ぶために3つの過程があると指摘します<sup>4)</sup>。第1の段階は「生きることが技術であるのと全く同じように、愛が技術であることを知ることである」とします。第2に技術を学ぶ過程は2つあって、「1つは技術に習熟すること、もう1つは実践の習熟である」と言います。そして第3に「名人となるために必要な第3の要素」として、「その技術に習熟することが究極の関心事となっていなければならない」と主張します。要するに、フロムによると「愛が技術だ」と知り、「技術と実践に習熟」し、「技術の習熟を究極的関心」とすることによって、人は愛を生きる名人となるのです。

E. フロムの提言によって皆さんは愛を生きる名人となれるのでしょうか。彼が愛の重要な一面を教えていることは間違いありません。けれども、「愛は技術」という立場が全てだとすると、単なるテクニクに終わってしまいかねません。しかし、愛を単なる技術としていいのでしょうか。「そうではない」と私は考えます。愛を育てる技術は大切だけれども、同時に「愛は技術」という

---

2) Fromm, Erich. 懸田克躬訳『愛するということ』紀伊國屋書店、1959

3) Fromm, Erich. 懸田克躬訳、前掲書、1頁。

4) Fromm, Erich. 懸田克躬訳、前掲書、7-8頁。

だけでは理解できない大切な要素がある。恋愛には人生の深さと豊かさを教えてくれる精神的要素があるからです。

そこで、「恋愛における愛とは何なのか」を考えてみる必要があります。この愛について倉田百三が『出家とその弟子』<sup>5)</sup>で語っている言葉をいくつか紹介します。恋について尋ねる若い僧 唯円に向かって親鸞は答えています<sup>6)</sup>。

苦しいものだよ。……罪にからまったものだ。この世では罪をつくらずに恋をすることはできないのだ。

このように恋の苦しさを語った上で、親鸞は説いています。

いけなくてもだれも一生に一度は恋をするものだ。……この関所の越え方のいかに多くの人々の生涯は決まると言ってもいいくらいだ。……まじめにこの関所につつかれば人間は運命を知る。愛を知る。すべての知恵の芽が一時に目ざめる。魂はものの深い本質を見ることができるようになる。

恋のやり取りで、語り手である親鸞も聞き手である唯円も僧です。けれども、僧という立場にもかかわらず、彼らは真剣に正直に恋について語り合っています。それは人間である現実から逃げていないあかしです。恋から逃げていては、深く人間を生きることにはならないからです。あるいは、いい加減に恋を遊び事としていても豊かな人間性を育てることにはなりません。だから、親鸞は「恋をすればするでよい。ただまじめにひとすじにやれ」と教えるのです。

これまでに恋をして輝いている人を何人も見てきました。好きというエネルギーによって、彼らは心も体も言葉も輝かせていました。その時にまた、彼らは真剣に悩んでいました。恋をすることによって、他者の持つ悲しみや悩みがあたかも自分の問題のようになるからです。なぜなら、人は恋をする時に内面

---

5) 倉田百三『出家とその弟子』角川文庫、1951

6) 倉田百三、前掲書、86-87頁。

の深みから生きるようになっていきます。そして、深く生きる時に人は他者の悲しみをこれまで以上に共感するものです。だから、恋は人をして人間らしい生き方へと招き、育ててくれると言えるのです。

### (3) 恋愛と結婚

ずいぶん前から、私の知る限りでは1970年代から「結婚や家庭が揺れている」と言われてきました。当時、戸籍制度に認められる男性中心主義に対する抵抗、家庭における過重な女性への役割負担とそれに対する男性の無責任、女性の経済的自立に伴って増えてきた離婚が指摘されていました。最近では同性愛者の結婚生活への主張がされるなど、結婚と家庭の在り方は揺れ続けています。しかしそれにもかかわらず、家庭は私たちにとって基本的なそして最も強い所属意識を寄せる共同体です。人は家庭に生を受け、家庭の中で人間として育てられ、やがて家庭に責任を負うという人と家庭の関係に大きな変化は認められません。

そこで、とりわけ若い皆さんが恋愛と結婚そして家庭をどのように考えられるのかは重要なテーマとなります。

恋愛と結婚は連続するのか、しないのか？

恋愛と結婚は同質と考えてよいのか、異質なのか？

西南学院の学生にしばしばこのような質問を投げかけています。「突き詰めて考えたことはない」と前置きをした上で、ほぼ半々の答えが返ってきます。一方の学生は「恋愛と結婚は連続する」と考えたいし、「連続させたい」と希望しています。それに対してもう一方の学生は「恋愛と結婚は異質なので、相手は別に考えた方がいい」と答えます。ある女子学生は恋人に結婚について聞いたところ、「あまりに無責任だったので、相手は考え直そう」と考えていました。それから女子学生から多く聞かれた答えなのですが、「結婚相手は同棲生活をしてみて、相手を確認してから結婚したい」という意見もあります。

いずれにしても恋愛と結婚について尋ねてみると、学生の意見は二つに分かれるのです。これらの考えを総合的に分析してみると、恋愛と結婚にはある種の連続性と非連続性があると分かります。ここで浮かび上がってくるのが、結婚する大人に必ず必要な条件として指摘されている「成熟性」です。オルポート<sup>7)</sup>という心理学者は「たえず自分が自分になっていく形成」や「長期にわたって不安を克服していく力」を成熟性の特色としてあげています。そこで問題は形成力や不安の克服に認められる成熟性、それを人はどこで手に入れるのかです。答えは青年期にあります。青年はまだ安定した自己形成や長期にわたる不安を担い続けていく力を持っていません。彼らが持ち合わせているのはむしろ時々の関心に大きなエネルギーを注ぎ、不安があるとそれを深刻に悩む力です。恋愛や失恋においては特にそうです。青年期は人生において最もエネルギーに満ちた時期であり、だからその時の課題に全力で取り組み、複雑な人間関係を経験しては深く悩むのです。

このような青年期に特有の真剣な取り組みを通して、人は次第に成熟性を獲得していきます。だから、恋愛の経験と結婚生活には成熟性という観点から見ると連続性があります。けれども、この連続性は恋愛と結婚の相手と同じという意味ではありません。恋愛で経験した愛することの現実と訓練、それらによって獲得した人間としての成熟性が、結婚生活への責任を負うだけの人格を育てていたのです。

他方、恋愛と結婚生活に異質な愛の側面があることも明らかです。事例として、私の両親の場合を紹介しましょう<sup>8)</sup>。彼らは若い日に恋に落ちて、駆け落ち結婚をします。それから40年余りの結婚生活をした後に、1991年3月に父は亡くなります。その2日前の夕方でした。その時、病室には父と母しかいませんでした。看病で疲れ切っていた母は何を思ったのか、父の耳元で何回となく聞いたのです。

---

7) Allport, Gordon W., 豊沢登訳『人間の形成』理想社, 1959

8) 参照, 塩野和夫『好きが一番』ヨルダン社, 1995

お父ちゃんは、お母ちゃんが好きか？

お父ちゃんは、お母ちゃんが好きか？

父は闘病生活でやせ衰えていました。その上、癌の痛み止めで意識ももうろうとしていたのです。だから「もう、お父ちゃんは何も分からないだろう」と思って、それでも母は父に語りかけたのです。すると、声の聞こえてきた方向に父はやせ衰えた手を伸ばします。そして、両手で母のほおを暫くなでて、こういう意味のことを言ったのです。

お母ちゃん、大好きや！

これが父の最後の言葉となりました。彼は「真面目の上になにかがつく」と言われた男でした。そんな父と母が恋に落ちた時に、それはコントロールのきかない何かすごい力で二人を押し出す力を持っていたのでしょうか。それから、必ずしも順調とはいえない苦勞の多い40年余りを2人は共に暮らしました。「お母ちゃん、大好きや！」という父の最後の言葉には、彼らの結婚生活の全てが込められていると思います。そこには恋愛だけでは理解しようのない、もっと深くもっと優しくもっと強い愛に満ちた二人の関係があると思います。だから、彼らの最後の愛は初めの愛とは異質であり、結婚生活とはこのような愛を育てていく場だと考えるのです。

## 結— 好きというエネルギー

結びとして3つのことを申し上げます。

まず第1に、好きというエネルギーについてです。好きというエネルギー、これは神が私たちに与えて下さった最も素晴らしい賜物の1つに違いありません。このエネルギーによって、人は若い時も、成人の日々も、年老いて後も、輝いて生きることができます。

第2は、好きというエネルギーが最も満ち満ちているのが青年期だという事

実です。広瀬善順という尼僧が、この青年期について書き残した言葉を紹介します。善順さんは京都にある女性の駆け込み寺の住職でした。失恋や離婚、人生に行き詰った多くの女性が駆けこんで来て、彼女に話を聞いてもらったのです。

解けようにも解けんものに取り組むのが若さのええところですよ。

若さというのは「ワァー！」という意気が心情、無茶が唯一の取柄どっせ。

ええな、血の騒ぎを大切にしなければ！

要するに善順さんは「好きというエネルギーを存分に生きなさい！」と勧めておられるのです。

第3回は今回なぜ「私の恋愛論」という講話をしたのか、その理由です。学問はその本質に「自分で納得のいく生き方を探し求める」作業があります。ところで、大学生という年齢を考えると、納得のいく生き方を求めるための基本的なテーマは2つあります。その一つが「恋愛・結婚・家庭」で、これに対する自分の考えを持つことです。もう一つは「仕事、あるいは社会参加」で、つまり働くことに対する考えを持つことです。これら二つの課題に対して青年期にある皆さんが自分の考えを持つことは、人間としてふさわしく生きる上でとても大切です。今回はその一つである愛について「私の恋愛論」というテーマでお話ししました。現在は恋愛にしても結婚にしても家庭にしても、様々な問題を抱えて揺れています。しかしだからこそ、そのような時代の中であって皆さんは自分にふさわしい生き方を、学生の間にはっきりと考えておいてほしいのです。

祈りましょう。

天にいます神よ、

あなたは私たちに好きというエネルギーを与えて下さっています。ですから、この場に集う若い皆さんが青春の日のエネルギーを燃やしなが

にふさわしい生き方，納得のいく愛を若い日に十分に学ばれることができるように，導いて下さい。

彼女たちの青春を豊かに祝してしてください！

主イエスのみ名によって祈ります。 アーメン

## 2 私の教育論

### 序 — テーマについて

今回のテーマは「私の教育論」です。初めに、この主題について2つのことを申し上げておきます。

1つは「私の」についてです。「恋愛論」にしても「教育論」にしても、その前に「私の」と付けるのは「個人的な」とか「経験に基づく」といった意味があります。ですから、講演で語られる内容は必ずしも専門的な研究を重ねてきた結果ではありません。けれども、個人的な経験を通して語る。すなわち、人生の先輩として聖書に聞きながら語る。そこには、皆さんに身近な事柄として聞いていただくだけの内容があると考えます。

もう1つは「教育論」です。福岡女学院大学は私立の大学、それもキリスト教系の私立大学です。聞くところによると、私立にもいろいろあって経営主義を前面に出している学校もあるそうです。そのような中であってキリスト教系学校の多くは教育そのものに夢を持っています。人を育てる事業に使命を感じています。私もそのようなキリスト教の学校で育てられました。そこで、キリスト教教育によって育てられた者として聖書に聞きながら、皆さんが福岡女学院で学んでおられる意味を考えてみたいのです。

### (1) 知恵と分別を獲得する

箴言第4章1～9節を読みます。

- 1 子らよ、父の論しを聞け  
分別をわきまえるために、耳を傾けよ。
- 2 わたしは幸いを説いているのだ。  
わたしの教えを捨ててはならない。
- 3 わたしも父にとっては息子であり  
母のもとでは、いとけない独り子であった。

- 4 父はわたしに教えて言った。  
「わたしの言葉をお前の心に保ち  
わたしの戒めを守って、命を得よ。
- 5 わたしの口が言いきかせることを  
忘れるな、離れ去るな、  
知恵を獲得せよ、分別を獲得せよ。
- 6 知恵を捨てるな。  
彼女はあなたを見守ってくれる。  
分別を愛せよ  
彼女はあなたを守ってくれる。
- 7 知恵の初めとして  
知恵を獲得せよ。  
これまでに得たものすべてに代えても  
分別を獲得せよ。
- 8 知恵をふところに抱け  
彼女はあなたを高めてくれる。  
分別を抱きしめよ  
彼女はあなたに名誉を与えてくれる。
- 9 あなたの頭に優雅な冠を戴かせ  
栄冠となってあなたを飾る。」

箴言第4章1～9節から3つの要素を抜き出して、そこから教育について話します。第1の要素は1～3節で前文に当る部分ですが、ここは最後に触れません。本文は4～9節ですが、ここからは2つの要素を抜き出します。1つは5節後半と7節で繰り返される言葉、すなわち「知恵を獲得せよ、分別を獲得せよ」という強い奨めです。もう1つは6節と8・9節の内容で、知恵と分別の獲得によって何を得るのかが書かれています。

そこでまず、第1の要素である「知恵を獲得せよ、分別を獲得せよ」という

奨めです。ここで繰り返し強調されている「知恵」とは何なのでしょう。 「分別」とは何なのでしょう。それは福岡女学院で学んでおられる皆さんにとって、何を意味するのでしょうか。原語を調べてみますと、「知恵」と訳されているのは「ホックマー」というヘブル語です。この言葉は「物事を秩序づけ、統御する能力」を意味します。「分別」と訳されているのは「ベィファー」というヘブル語で、「物事を識別し、分析し、見抜いて統御する能力」を意味します。ですから、「知恵」にしても「分別」にしても、それらは知識自体、技術自体を意味しません。学校で学んで身につける知識や技術は、知恵以前、分別以前の事柄です。知恵や分別が問題になるのはそれからです。つまり、学んで身に付けた知識や技術をどのように用いて生きるのか。あるいはどのように用いて社会に貢献するのか。ここで必要となる価値観や生き方、それらを真剣に考えるためになくてならないものが知恵であり分別なのです。

現在の教育制度で、「知恵」や「分別」を養うことができるのは受験勉強以降でしょう。しかし、日本の大学生がこの貴重な機会を有効に用いているとは思えません。この春に西南学院大学に勤務しておられた中国人の研究者から、「大学教育現場で見た日本の大学生」という話を聞きました。概要はこのようなものでした。

西南学院大学の学生は社会的概念を受け入れることが難しい。  
彼らは研究に必要な抽象的・論理的・構造的理解が出来ない。  
考えることを習慣としていないので、考えることもあまりできない。  
ディスカッションもできない。

率直に話して下さった内容から、西南学院大学で学ぶ学生の姿がはっきり浮かび上がってきます。彼らに知識はあるのです。けれども、学んだ知識を分析し、考察し、他者に向けて表現することができない。「知恵」や「分別」が働いていないからです。何故でしょうか。1つの大きな原因は受験勉強でしょう。知識の詰め込みに精一杯の勉強では、その知識をどのように用いるのかという

知恵や分別は身に付けようがありません。その影響は大学生にまで残っていて、よほど自覚的に取り組まないと大学生活においても人間にとって本当に大切なものを身につける機会を失ってしまいます。

ここにキリスト教学校の重要な存在価値があります。キリスト教学校では知識や技術も大切ですが、それらを教育の最終目標とはしていません。知識や技術に知恵と分別を加えて、全人格的に見た人間を大きく育てることを目指します。そのために、人間を育てる教育への視点と情熱を持っているのがキリスト教学校です。

私の場合で具体的に紹介しましょう<sup>9)</sup>。私は大阪にあるキリスト教系中学校に受験しました。そのために小学校5年生から受験勉強に取り組みます。ところが、中学2年生の夏にある経験をきっかけにして、「勉強するとはどういうことか?」「点数なんかで人間は分からない!」と考えるようになります。それで、2学期になると次々と先生方に「何故、点数のために勉強をしなければならぬのですか?」と聞いたのです。

ある若手の先生は正直に答えて下さいました。

私にも分からない。しかし、幅広く学べる時は今しかない。これも大事なことだよ。だから、しっかり勉強しなさい。

中学3年生の担任だった先生は、卒業式の日在山陰地方で漁師さんが地引網を引く時に皆で声を合わせる歌を大きな声で歌い、励まして下さいました。

諸君は中学校を卒業して高校に進む。しかし、中学を出ると働く仲間もいる。彼らの労働は尊い。だから、働いている人たちに恥ずかしくないように、高校に行ったら汗を流して勉強しなさい!

---

9) 参照、塩野和夫『キリスト教教育と私 前篇』教文館、2013

高校の校長は繰り返し教えて下さいました。

塩野君、今の教育で生徒たちが点数によって評価されることには仕方のない一面もある。しかし、人間には点数では計れないものがいっぱいある。塩野君はこのことを忘れてはいけない。

もっといろいろ聞いたと思います。いずれにしても、キリスト教学校で学んだのは、勉強を点数の魔力<sup>10</sup>から解放することでした。点数のための勉強から解放された私は、もっと自由に伸び伸びと、そして真剣に勉強しました。充実した学びの日々に「知恵と分別を身につける」、すなわち人生をいかに生きるのかを考える時間はたっぷりであったのです。振り返ってみて、そのような勉強ができたのはキリスト教学校を学びの場としていたからだと分かります。そこでは日常的に「知恵を身に付け、分別を身につける」ことが奨められていました。しかも、それを指導して下さる先生方がいつも身近におられました。事情は福岡女学院も同じでしょう。だから、皆さんはこの大学で「知恵と分別を身につけて」、ふさわしく生きることを求めています。

## (2) 知恵と分別は守ってくれる

次に学びたいのは、本文の6節と8節で語られているもう一つの要素です。

- 6 彼女（知恵）はあなたを見守ってくれる。  
彼女（分別）はあなたを守ってくれる。
- 8 彼女（知恵）はあなたを高めてくれる。  
彼女（分別）はあなたに名誉を与えてくれる。

---

10) 参照、「点数の魔力」（塩野和夫『一人の人間に』57-59頁）

6節と8節で語られていることは本当でしょうか。私たちを守ってくれるもの、高めてくれるものは、本当に「知恵」と「分別」なのでしょう。もしそうだとしたら、知恵と分別を身につけることはとても重要な課題になります。

やはり私の経験を紹介しましょう<sup>11)</sup>。私は10年間キリスト教会の牧師をしていました。一筋でした。とても順調で、目に見える成果も上がっていました。何よりもイエスの福音によって救われる人が毎年与えられて、喜びを共にしていました。ところが、突然この幸いな日々が音を立てて崩れていくのです。それは初め、妻の心身の不調となって現れました。医師からは「このまま留まっていたら、奥様もあなたも命にかかわる事態になる」と警告されました。その上で、妻に対しては「少なくとも半年は宇和島を離れるように」と助言を受けます。大阪の実家へ妻を送る朝、私は彼女の手を取って慟哭しました。教会の仕事に一筋だった私は、彼女の心身に何が起きているのか気づこうともしていなかったからです。それから、難しい事態が次々と教会に起こりました。そんなある日、宇和島の教会で最後に洗礼を受けた人からこのようにアドバイスされたのです。

塩野先生は宇和島で実によくされた。しかし、このまま宇和島に留まっていたら、塩野先生は自分の可能性を芽生えさせることもなく終わってしまう。先生はこれまでにすべきことは十分にされた。だから、今は自分を守り、奥様を大切にしなければならない。そして、これからは神様が塩野先生に与えておられる可能性を芽生えさせ、花咲かせ、実らせなければならない。

このアドバイスを「本当にそうだ！」と納得できたので、宇和島を後にしたのです。悲しいことが山のようにあった時に、私たちを理解し、味方となり、悲しみを分かち合ってくれた方がいました。彼らのことを生涯忘れることはないでしょう。

---

11) 参照、「キリスト教主義教育と私」(塩野和夫『問う私、問われている私』36-56頁)

大阪に帰った私は、同志社大学でもう一度研究を始めました。しばらくして、西宮にあった教会の牧師と当時松永晋一先生が学長であられた聖和大学で3年足らずでしたが非常勤講師をしました。その間、ずっと持ち続けていたのは「私の可能性、神が与えて下さっている可能性とは何なのか?」という問いでした。答えは全く思いがけない所から与えられます。手がかりとなったのは聖和大学の学生でした。初めて大学生を教えるようになって思い出したのは、自分が教えられた日々のことです。かつて教えられた日々を思い出しながら、そのように教えました。それはこういうことです。

一人ひとりを大切にする。

一人ひとりに期待する。

百名ほどのクラスでしたが、一人ひとりと真向かいになって教えました。そうすると、1年間に彼らは学力においても人間性においても確かな成長を示してくれました。何人かの学生からは相談を受けたこともあります。問題を乗り越えた時にある女子学生は、きれいな便箋に課題を克服していった経過と感謝の言葉を記してくれました。一人ひとりの学生を大切に期待して教えた時に、彼らの成長と困難を克服していく喜びを共有できました。そのような共に歩む日々から、「そうか、ここに私の可能性があるのだ」と気づかされたのです。

そこで、皆さんに申し上げます。私たちを見守ってくれるものとは何なのか。私たちを高めてくれるものとは何なのか。それは何よりもまず知恵であり、分別です。その上で、知恵と分別を大切に生きて育てられる思いやりの心です。宇和島で途方に暮れていた時に受けた言葉、「これからは自分を守り、奥様を大切にしなければならない。そして、自分の可能性を花咲かせなければならない」というアドバイス、あれはまさに知恵の言葉でした。物事を的確に理解して、そこから最もふさわしい道を探し出す。それは知恵と分別によってこそなされるのです。山のように悲しみがあつた時に、慰めとなり生きる勇氣を与えてくれたのは、悲しみを共感しながら励ましてくれた仲間でした。人の

思いと悲しみを察し、共感しながら慰め励ます。もちろんそこには愛があるのですが、それは鋭く洞察する知恵と分別を伴った愛なのです。さらに幸いなことに、私は聖和大学の学生と喜びを共有できました。それは彼ら一人ひとりを大切に期待する姿勢から与えられたものです。いうまでもなくそのような姿勢、生き方はかつてキリスト教学校で私自身が教えられた知恵でした。

人生は長くしばしば難しい事態に遭遇するものです。難しい事態の中には、時として自分の力では解決しようのない事柄があるものです。そのような中に置かれる時、それでも私たちを守ってくれるものとは何なのでしょう。そのような人生をそれでも人間としてふさわしく生きることへと導いてくれるものとは何なのでしょう。箴言はそれが知恵であり、分別だと語っています。

### (3) 時を超えて伝えられるもの

最後に第4章1～3節からもう一つのメッセージを聞きます。

- 1 子らよ、父の諭しを聞け  
分別をわきまえるために、耳を傾けよ。
- 2 わたしは幸いを説いているのだ。  
わたしの教えを捨ててはならない。
- 3 わたしも父にとっては息子であり  
母のもとでは、いとけない独り子であった。

1～3節は面白いことを言っています。この個所の語り手は父であり、聞き手は子です。ところが、語られている内容は父が子供であった時に彼の父から聞いた、つまり今の聞き手からするとおじいさんから父に語られたものと同じだということです。つまり、ここで語られている事柄は祖父から父へ、父から子へと語り継がれているという体裁をとっています。このような体裁を取る理由は何なのでしょう。それはここで語られている内容は時代を越えているという主張です。

人間の歴史を500年、1000年単位で見ると、ほとんどは変化しています。しかし、その中に少しも変わっていないものがあります。このように、人間の社会は変わりゆくものと変わらないものによって構成されています。キリスト教学校も同じです。校舎や教師と学生、それに教科内容は時代と共に変わっていきます。そのように多くが変わっていく中であって、キリスト教学校には変わらないものがあります。しかも、それは学校で最も大切な精神性としてあります。なぜ、この精神性が大切なのか。それはこの精神性にキリスト教学校の存在理由があるからです。だから、語り手から聞き手へ、新たな語り手から聞き手へと、キリスト教学校の精神性は時代を越えて伝えられていきます。

私の経験を紹介しましょう。キリスト教教育で大きな影響を受けた一人に生島吉造先生がおられます。生島先生は高校3年間の校長でした。高校の卒業式を数日後に控えた日でした。先生から招かれて校長室でいろいろ伺った後に、「塩野君には3つのことを言っておきたい」と切り出されました。第1は「大学に入ったならば、人間を見る眼を養いなさい」という助言でした。第2は「同志社大学を卒業したならば、それで研究を終わらないで、イギリスかアメリカの大学で研究を続けるように」という希望でした。その上で、生島先生は少し間をおいて、私をじっと見つめながら、こういうことを言われたのです。

塩野君！

塩野君は私が同志社香里で打ち込んできたキリスト教教育をよく分かってくれたと私は信じている。そこで、塩野君にお願いがあるのだ。……ひとつ、私の志を引き継いで同志社のキリスト教教育に携わってもらえないかね。

さきほど、聖和大学の学生が確かな成長を示し喜びを共有できた時に、「自分の可能性が分かった」と言いました。実はあの時に同時に思い起こしたもう一つの言葉があったのです。それが生島先生の「ひとつ、私の志を引き継いで同志社のキリスト教教育に携わってもらえないかね」というあの志を託された言葉なのです。20年余前に聞いて以来、恩師の言葉を忘れた日はありません。

しかし、分からなかったのです。あの言葉は私に対して何を意味しているのかが分からなかったのです。ところが、聖和大学での経験によって新たな可能性が開けた時に、生島先生のあの言葉が20年の時を越えて生き生きと甦ってきたのです<sup>12)</sup>。

### 結 — 教育精神を継承する

キリスト教教育は「人を育てることに夢を持ち、使命感を抱いている」と言いました。それをもう一步進めて言うと、このようになります。キリスト教教育は、それを現場で担っている教員が自らの夢や使命を学生に託します。託された学生はいつの日かその精神性をいろいろな場でそれぞれの仕方で担うことになります。だから、キリスト教教育の精神性は歴史を貫いて生き続けるのです。

皆さんは福岡女学院で知識や技術を身につけられるでしょう。しかし、それだけではないのです。その上に、キリスト教から来る知恵と分別を受けて、人間らしく生きるすべを学ばれる。やがて学校を卒業してそれぞれの場で働き生活する時に、皆さんはきっと女学院の精神性を生きておられます。女学院で学んだ日々はこの精神性を先生方から託されていたからです。いつの日か、職場にあって、家庭にあって、社会にあって、女学院の精神を持って豊かに生きてほしいと託されていたからです。

私がこの事実気づいたのは40歳の時でした。すでに生島先生は地上においでではありませんでした。それでも、あの時に先生が向けて下さった鋭い眼差しと訥々とした言葉は、まるで昨日の出来事のように生き生きと甦ってきたのです。だから20年の時を越えて、先生の志を新鮮な決意を持って受け止めることができましたのです。皆さんも変わる事のない福岡女学院の教育精神を受け止めて、それを生きる人となっていたいただきたいと希望します。

---

12) 参照、塩野和夫「よみがえる言葉の輝き」(『福音と世界』12月号、新教出版社、1994、1頁)

祈りましょう。

天にいます神よ、

あなたは1885年にミス・ギールを用いて、この地に福岡女学院を立てて下さいました。その時より変わることのない精神性を持って女学院は教育にあたり、多くの人材を送り出してきました。その精神性と変わることのない真実を、今女学院に学ぶ学生の皆さんがしっかりと受け止めることのできるように祝し、導いて下さい。

主イエスの御名によって祈ります。          アーメン

## おわりに

2回の講演には全体テーマがなかった。だから、「私の恋愛論」と「私の教育論」というおおよそ一貫性のない2回の講演題となった。しかし、これらの講演内容には本当に共通性がないのだろうか。

あの時、福岡女学院に学ぶ学生をイメージするために事前に何冊かの冊子を送っていただいた。それらの冊子をまず何度も読み返しなが、女学院に学ぶ女子学生を様々に思い描いたことを記憶している。ある程度女子学生のイメージが出来てから、彼女たちに向けた講演の作成に取りかかった。結果的に2回の講演題は全く違ったものになった。しかし、女子学生に向けて準備したという経過では共通している。

そうだとしたら、準備段階での共通性から講演内容においても、通じるものが生じていたのではないか。このような観点から読み直してみると、一つには「人間を生かす真実」を語ろうとしていたことが分かる。「私の恋愛論」では、それは愛である。「私の教育論」では、それはキリスト教教育に内在する精神性である。これらの真実を若い女子学生に向けて準備したことから、もう一つの共通性が生まれている。それは出会いである。人間としてふさわしく生きようとする時に、人は様々に出会う。言うまでもなく、人は生涯において出会いを重ねる。しかし、若い日の出会いは格別の意味を持つ。自我を形成する青年期に人は凝縮した出会いを経験するからである。

したがって、もし2回の講演に全体テーマを付けるとすれば、「青年期に求める真実の出会い」とでもなるだろう。